



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

キリストの聖体 A年(2023年6月11日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：申命記 8章2—3、14b—16a節

第二朗読：コリントの信徒への手紙1 10章16—17節

福音朗読：ヨハネによる福音書 6章51—58節

ご聖体のように尊とうといものに変えていただく

第一朗読の一節に注目してください。

「主しゅはあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖せんぞも味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。」(3節)。

「主はあなたを苦しめ、飢えさせ」とあります。前節でも同じように「主は苦しめて試ためし」とあります。荒野の旅の中でイスラエルの民が体験した苦しみ、飢えは、神さまからの試練しれんだったと理解りかいされています。こういった苦しみを経て、神さまとの結びつき、交わりが深まっていきました。

しかし主は、「マナを食べさせられた」とありますから、民を試す神さまは、民を放ほうっておく神さまではありません。試みは、神さまとの出会い、交わりのきっかけとなります。

そして、「人はパンだけで生きるのではなく……」と続きます。

『出エジプト記』のマナの物語(出16章14-35節)を見てみると、モーセを通して語りかける神さまと、その言葉ことばに応えていく民、という構成こうせいになっていることに気づかされます。

「わたしはイスラエルの人々の不平ふへいを聞いた。彼らにこう告げよ、『お前たちは夕暮れには肉を食べ、朝にはパンを飽あきるほど食べる。そしてお前たちは、わたしがお前たちの神、主であることを知るようになる』(出16章13節)。

とあるように、マナの出来事を通して、神の言葉が実現すること、そして神さまがイスラエルの民をはからって、配慮してくださることを、民は体験していったのです。そうしますと、マナをいただいたということも大切でしょうけれど、むしろ、神さまが語られる言葉が実現していき、その言葉を通じてイスラエルの民が救われていった、という事実のほうがもっと大切になります。

四十年間、荒れ野をさまよっていた時代に、ずっとはからってくださった神さまのわざを思いだしているのが第一朗読になります。神さまは、関わり、配慮し、はからってくださる方なのです。もちろん、神さまによる試しはありますが、それは、神さまが人間とより親しくなるための試しのようなものです。

神さまのはからいを信じるとは、神の言葉に信頼をおくことに他ならないのです。

神の言葉で人間は生きます。なぜなら、神の言葉はいのちそのものだから(ヨハ1章4節)。イエスさまは、人となった神の言葉(ヨハ1章14節)です。そのイエスさまのからだであるご聖体をいただいて、わたしたちは生かされるのです。

「苦しみ、愛、あらゆる徳の実践によって変えられたわたしは、『これはわたしのからだ、わたしの血である』というあなたの魂の叫びと一つにさせていただいて天へと昇っていきたい」。

これは、メキシコの神秘家、福者アルミダ・コンシェプション・カブレラの言葉です。人生のなかで身にふりかかる苦しみや悲しみ、また小さな愛の体験、そして、より正しく生きていこうとする生き方、こういったものを通じてわたしたちは変えられていきます。

そして最終的に、「これはわたしのからだである」というイエスさまの言葉に支えられて、わたしたちもご聖体のように変えられて、人生を終えていくのです。

